

ひと

「コンビニ人間」で芥川賞に決まった

むらた さやか
村田 沙耶香 さん(36)



朝から昼過ぎまでコンビニでアルバイト。明け方と退勤後の午後、小説を書く。そんな「作家兼コンビニ店員」が、去年は又吉直樹さんの受賞で話題を集めたこの賞の、新しい主役に躍り出た。

受賞作も、「思い入れがありすぎて今まで書けなかった」というコンビニの話。社会になじめず、コンビニで働くときだけ充実感を

得られる女性の物語だ。「人間である以上にコンビニ店員」という主人公を半ば異様に、半ばユーモラスに描いた物語の背後に、個性的な存在をおおらかに認める世界への切実な願いがにじむ。

20代前半で作家デビューし、2009年に野間文芸新人賞、13年に三島由紀夫賞。小説家としての実績を着実に重ねてきた。一方で今も週3日、コンビニで働く。

「社会との接点があるほうが、小説が進む。空想の世界に閉じこもりがちなので、引き戻してくれる場所としても必要なんです」

大学時代、芥川賞作家の宮原昭夫さんが教える「横浜文学学校」の門をたたいた。作家として歩む上で今も大きな支えだ。

「小説家は楽譜を書くだけで、演奏するのは読者だと教わった。読んだ人の心に、その人だけの音楽があふれ出すような小説を書きたいと思っています」

大好きなコンビニを描いた今回の「楽譜」。日本中の読者の心に、多彩な音色がきくと、流れ出す。

文・柏崎敏 写真・関田航